

JF 日本語教育スタンダードを利用したコースデザインの試み Trial of Course Design Using JF Standard for Japanese-Language Education

郭 穎侠（香港中文大学專業進修学院）

要旨

本研究は Higher Diploma プログラムで日本語を専攻している日本語学習者対象のコースデザインの試みである。筆者は学習目標と学習活動と学習成果の評価を一貫性のあるものにするために、具体的な授業の目標設定と OBTL にそう評価という二つの課題で日本国際交流基金の JF 日本語教育スタンダードの利用を試みた。

キーワード： JF スタンダード；総合日本語；目標設定；評価

1. はじめに

香港中文大学專業進修学院では 2012 年 9 月から「応用日本語」（Applied Japanese Language）という日本語専攻の「高級文憑課程」（Higher Diploma）プログラムを新しくスタートしている。コース終了時点で日本語能力試験 N2 以上の日本語能力を目標としている。また、2011 年から OBTL（Outcome-based Teacher and Learning）を導入していて、2014 年にコースデザインを見直すことになっている。筆者は 2010 年からこのコースのデザインに参加し、全体の枠組みから個別の科目のティーチングプランまで携わった。そして、2012 年 9 月からこのコースの最初の科目「総合日本語 1」（Integrated Japanese 1）が始まり、授業を担当している。そこで、1）学習者のニーズに合う個々の授業の目標設定、2）OBTL に沿う学習評価、という二つの研究課題がまだ残っていることに気付いた。

そこで、2012 年 9 月に「総合日本語 1」の授業が始まると同時に、筆者は新入生全員を対象にアンケート調査と聞き取り調査を行い、その日本語学習ニーズとビリーフを分析した。その結果と分析をもとに、日本国際交流基金の JF スタンダードを利用し、上の二つの課題を解決する方法を探った。

1.1. JF 日本語教育スタンダード

日本国際交流基金は 2010 年に JF 日本語教育スタンダードを公開し、「相互理解のための日本語」を理念とし、「課題遂行能力」と「異文化理解能力」が必要であると考えている。JF スタンダードの活用事例は香港ではまだ報告されていないが、日本国内と海外にあり、プーリク、イリーナ（2010）など先行研究も発表されている。学習者の日本語熟達度の尺度として「CEFR の共通参照レベル」を採用し、「Can-do」文で示している。Can-do を利用すれば、具体的な学習目標を設定することもできるし、学習目標と学習活動と学習成果の評価を一貫性のあるものにすることもできると考えられる。

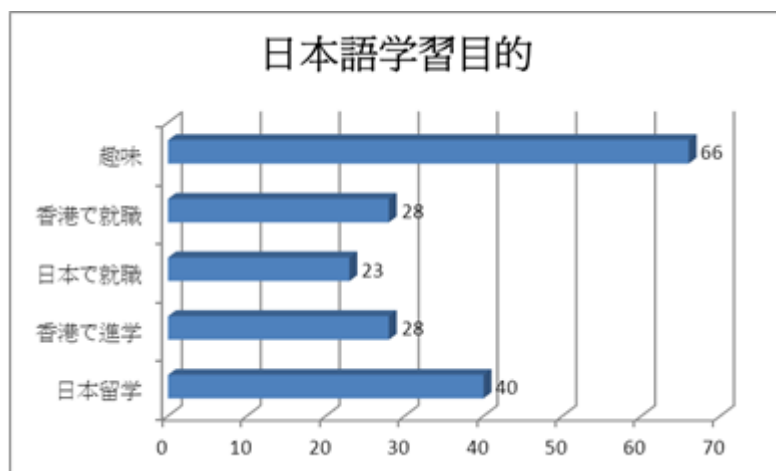
1.2. コースの概要

「総合日本語1」コースの対象者は高校を卒業したばかりの学生が中心で、2年間フルタイムで19科目（56単位）、計840時間の日本語授業を受けることになっているが、このコースでは週16時間120時間の勉強をする。コース全体の目標としては、完成することによって学生ができるようになることを三つあげている。1）ひらがなとカタカナを区別したり、読んだり書いたりすることができる。2）日常生活（例えば、願望、提案、経験など）に関する短い文章を読んだり書いたりすることができる。3）将来の日本語学習のために正しい学習態度と有効な学習方法を身につける。

2. 事前調査

コースデザインを目指し、学習者のニーズ、日本語使用状況、ビリーフを把握するために、コースが開始する最初の週でアンケート調査と聞き取り調査を企画・実施した。その結果、ニーズ分析では次のことが明らかになった。学習者の中で、「日本に行ったことがある」と答えた人は39%、そのうち64%が家族旅行、日本語能力試験に合格している人は（N3、N4、N5あわせて）25%、在学中に日本に留学したい人は63%いた。また、日本語学習目的は複数回答で、図1. のようになっている。つまり、当初設定した進学と就職のための日本語だけでなく、趣味のための日本語も取り入れる必要がある。そのため、個々の授業の目標設定に趣味などに関する内容や活動も取り入れるべきだと考えられる。

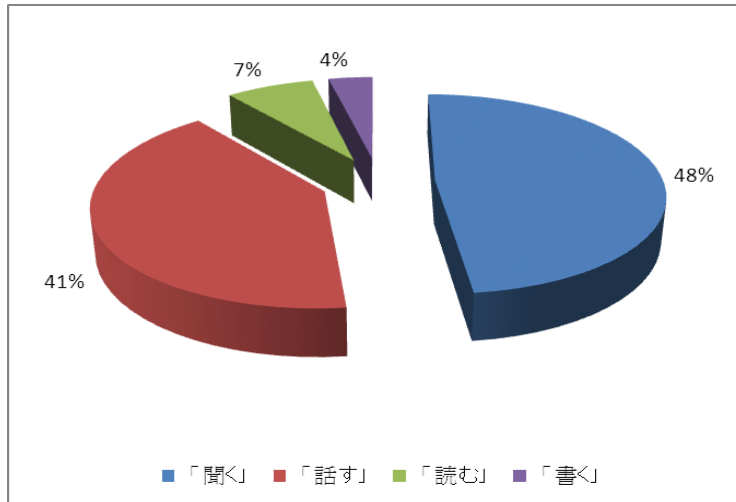
図1. 「総合日本語1」の学習者の日本語学習目的



レディネス分析では、日本語学習経験がある人は73%、能力試験に合格している（N3、N4、N5を合わせて）25%いたので、既習の日本語能力があるいわゆる「false beginner」の比率が高いことが分かった。これは例年通りのことで、予想できたことであるが、学習を評価する際にどう対応するかが課題である。

ビリーフ分析では、「聞く・話す・読む・書く」の四技能の中で、「聞く」が一番重要だと思ふ人は48%、「話す」が一番重要だと思ふ人は41%いたことが分かった。さらに聞き取り調査で学習者が主に日本語のアニメ、ドラマ、歌、番組を聴いていることが分かった。四技能を均等に伸ばしたいという教育側の立場との矛盾を授業でどのように解決するかが課題であるが、「聞く」「話す」活動を多く設けると同時に、その前か後の作業でバランスよく「読む」と「書く」練習をする必要があると考えられる。

図2. 「総合日本語1」の学習者のビリーフ（何が一番重要か）



3. コースデザイン

3.1. 各授業の目標

「総合日本語1」は教科書として“J Bridge for Beginners Vol. 1”. (2007)を使用している。この教科書は言語習得理論を応用した話題重視の教材で、本文の中に読解・聴解・発話練習と作文練習が含まれている。授業で学習した文法や語彙を使って、何ができるようになるのかを具体的に示しやすく、著者の（小山研究室の）ホームページに「教え方のポイント」があり、各課の学習内容と到達目標が表示されている。次の表はその到達目標を少し修正した上で、「みんなの「Can-do」サイト」で作成した第一課から第七課までの学習目標である。

レベル	種類	言語活動	カテゴリー	Can-do 本文	トピック
A1	活動	産出	作文を書く	友達（国籍、性別、所属、性格など）を紹介する作文が書ける。	人との関係
A1	活動	産出	作文を書く	自分と家族のこと（国籍、所属、職業、年齢など）を紹介する作文が書ける。	自分と家族

A1	活動	産出	話すこと全般	短い形容詞文を使って、ものの形状や特徴を説明することができる。	住まいと住環境
A1	活動	産出	話すこと全般	友達や家族の紹介(性格、好み、特技など)できる。	人との関係
A1	活動	やりとり	口頭でのやりとり全般	クラスメートに生活習慣(何をどのぐらいの頻度ですか)について話したり、聞いたりすることができる。	住まいと住環境
A1	活動	やりとり	口頭でのやりとり全般	指さしながら身近にある物の名前を聞いたり答えたりすることができる。	住まいと住環境
A1	活動	やりとり	口頭でのやりとり全般	簡単な表現でクラスメートを誘ったり、クラスメートの誘いを受けたり、断ったりすることができる。	人との関係
A1	活動	受容	聞くこと全般	簡単な説明なら、CDを聞いて、地図で場所を探すことができる。	住まいと住環境
A1	活動	受容	聞くこと全般	CDをきいて、ものの名前と値段が分かる。	買い物
A1	活動	受容	聞くこと全般	相手が形容詞を使ってゆっくり説明してくれれば、それが何かを当てることができる。	
A1	活動	受容	聞くこと全般	CDを聞いて、人の名前や職業を区別することができる。	

3.2. 評価

「総合日本語1」コースの評価は持続的評価で、教師による評価と学習者の自己評価の二種類ある。教師による評価は宿題とクイズ、期末試験からなる。宿題は3回あり、学習した語彙と文法の復習と読解の練習などである。クイズは3回あり、期末試験同様、語彙と文法のテストで、読みと書きの基本的な能力を測る。

学習者の自己評価とは学習者自身がこの学習によって、何がどのぐらいできるようになったかを評価することである。「Can-do」を利用して作成した「自己評価チェックリスト」を使えば、学習者が自分の日本語の上達をコースの途中や終りで確認することができ、ほかの人に伝えることもできる。学習の達成感、モチベーション維持にもつながる。最初教師が Can-do 本文を提示するが、慣れたあとに学習者が自分で新しい項目を作り、自分のできることをリストして評価することもできる。

4. おわりに

コースデザインはコースが始まる前に決定している部分もあるが、学習者の要望や新しいニーズの発見、学習の進み具合などによって変更していく必要があると考えられる。筆者は「総合日本語1」という新しいコースのデザインで、学習者のニーズに合う個々の授業の目標設定とOBTLに沿う評価という二つの課題で日本国際交流基金のJFスタンダードの利用を試みた。その効果を検証することが今後の課題であるが、「Can-do」を見直しながらコースデザインを改善し続けることも必要である。

【参考文献】

- 国際交流基金（2006）『国際交流基金 日本語教授法シリーズ1 日本語教師の役割／コースデザイン』ひつじ書房
- 国際交流基金（2010）『JF 日本語教育スタンダード 2010』国際交流基金
- 国際交流基金（2010）『JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック』国際交流基金
- プーリク，イリーナ（2010）「一般成人向けの日本語コースデザインの改善－ノボシビルスク市立「シベリア・北海道センター」の場合－」『日本言語文化研究会論集』100, 6-20
- S. Koyama (2007) “J Bridge for Beginners Vol. 1”. Bonjinsha.

参考サイト

- みんなの「Can-do」サイト <http://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>
- 小山研究室のサイト http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/koyama_web/bridge.html